

モンキャラメル 2002年に大阪市中央区で設立。社名は仏語で「私のキャラメル」。社長の稲葉一巳さんがかつて営んでいたアパレル店の名前を引き継いだ。「自らの新たな物語をつむいでいきたい」との思いを込めている。救急講座などに使うアニメ制作も手がける。看板キャラクターは犬の「ボジョレー」。

モンキャラメル (大阪)

事故や急病の人を救急車で運ぶ場合、既往歴やかかりつけ医が分かれば、搬送先を素早く探し出せるとされます。意思疎通がうまく取れない容体の人でも、そうした情報が分かる仕組みを考案した企業があります。きっかけは、あるアニメーションの制作でした。

カンサイの
カイシャ
ここが
オモロイ!

BUSINESS # KANSAI

小さなタグに 命守る情報



モンキャラメルの稲葉一巳社長。手に持つ丸いストラップが救急タグだ。8月27日、大阪市中央区



ヘルメットをかぶり、敬礼する犬のイラストが描かれた、ゴムひもつきの丸いストラップ。モンキャラメルが「救急タグ」という名前で展開する仕組みだ。

ストラップに内蔵するICチップと、スマホのアプリを連携させ、かかっている病気や飲んでい

取締役の榊原ますみさん 社長とは、けんかをすることもあ

から、救命処置の仕方を学べるアニメの制作を依頼された。

制作を進めるなかで、稲葉一巳社長(59)は「命を救うことに少しでも役に立てれば」と思い、同じような依頼を引き受けるようになった。

一方で、課題も感じた。総務省消防庁の統計によると、22年の救急出動件数は、約723万件で、約622万人が運ばれた。20年前の02年はそれぞれおよそ456万件、433万人で、増加傾向をたどる。

依頼の電話を受けてから、病院にいる医師のもとに着くまでの時間も長くなっている。

状況を改善し、少しでも命が助かる可能性を上げたいとして、救急タグを思いついた。当初の17年は、紙のカードに手書きする仕組みだったが、「雨にぬれると文字が読めない」などの課題が浮上。19年にいまのアプリ方式をつくった。

大阪市の一部や大阪府豊中市、羽曳野市などの消防管内などで使われ

て、現場の救急隊員からの評判も上々だという。

現在は、スマホを持っていない高齢者でも救急タグが使えるよう、QRコードからでも情報を読み取れる仕組みを、消防や大学、医師などと連携して考えている。

救急タグの認知度は「まだまだ十分ではない」と稲葉社長は語る。消防のイベントや19年に大阪市で開かれた主要20カ国・地域首脳会議(G20サミット)の会場でも配布した実績はあるが、次に見据えるのは25年の大阪・関西万博会場だ。

会期中は、世界各地からも多くの人が訪れる。訪日外国人客が、日本国内滞在中に交通事故に巻き込まれたり、病気を発症したりした際に、「言葉の壁が搬送の支障になる」恐れがあり、救急タグは一助になる。

このため、QRコード版の開発では、英語や仏語、中国語、ベトナム語など多言語で使えるようにする予定だ。

稲葉社長は「実際に訪日観光客の搬送が遅れたケースもあったと聞きませ